「芳草」考（二）—崔詩と徐詩における「芳草」—

森　博行

目次

縁起
第一節　唐詩に現れた芳草
第二節　崔顥の眺望詩
第三節　萋萋たる芳草
第四節　失墜した芳草
注釈

縁起

私は「大谷女子大学紀要　第29号第1輯」（一九九五年十月）に、「「芳草」考―晩唐五代文学の一面―」と題して拙文を発表した。この発表において、私は晩唐から五代の詩に「芳草」という言葉が異常に多発するという現象を指摘すると同時に、この現象の意味についても、不十分なものであるが、いささか卑見を述べた。ところで前回の報告では、論旨の関係上まったく触れることができなかったが、唐詩における「芳草」を調査している過程で、一つの詩句が心にかかっていた。それは、崔顥の「黄鶴楼」[1]詩の次の一句である。

春（一作芳）草萋萋鸚鵡洲

「春草」を「芳草」に作る文献があるという注記に私の心は動いた。「黄鶴楼」詩の場合、「芳草」と「春草」どちらが本来の表現なのであろうか、という疑問がわいたのである。今回はこれを解明することが主な目的である。前回報告した晩唐から五代の詩における「芳草」の多発という事実を踏まえながら、私の考えを述べてみることにした。前回の続編である。

第一節　唐詩に現れた芳草

『説文解字』（二下）に「芳は、香艸なり」とある通り、本来「芳草」は香り草の意味である。[2] しかし、詩語というものは、その言葉が使用された状況によって様々なヴァリエーションを持つものである。先ず初めに、唐代の詩において「芳草」が一般的にかおり草という意味を越えて、どのようなヴァリエーションを持っていたか、一瞥しておくことにする（なお「艸」字が「草」字に同じであることは言うまでもない。『広韻』巻三「第三十二晧・草」に、「『説文』に「艸」

に作り、百卉なり、と。経典相承けて「草」に作る」（四部叢刊初編縮本020 86頁下段）。以下、この論稿では「草」字に統一して表記する）。

1、前稿で取りあげた通り、屈原を連想あるいは象徴するもの。

2、前稿に引用しておいた劉長卿の「初至洞庭懐灞陵別業」[3]詩の「江皐に芳草を見、孤客　心は絶えんと欲す」に見られるとおり、故郷（家族、夫や妻）を連想するもの[4]（なお「芳草」から故郷を連想するというパターンは、『離騒』に既に見られる。「何れの所か独り芳草無からん、爾は何ぞ故字を懐うや」）。

3、陶淵明の『桃花源記』[5]の「武陵の人、魚を捕うるを業と為す。渓に縁いて行き、路の遠近を忘る。忽ち桃花の林に逢い、岸を夾んで数百歩、中に雑樹無く、芳草鮮美にして、落英繽紛たり、漁人甚だ之を異とす」に見られる超俗の世界（あるいは進んで仙界）を象徴するもの（唐詩については注35参照）。

4、李嘉祐の「暮春宣陽郡斎愁坐（以下省略）」[6]詩の「芳草も人に伴いて還た老い易く、落花も水に随いて亦た東流す」に見られるごとく、盛者必衰の象徴。

5、前稿でもっとも問題にした異性を連想するもの、あるいは心を落ち着かせてくれる自然物。

などである。

次に、崔顥の「黄鶴楼」詩の全文を見てみよう。

昔人已乗白雲去　昔人　已に白雲に乗りて去り
此地空余黄鶴楼　此の地　空しく余す　黄鶴楼
黄鶴一去不復返　黄鶴　一たび去りて　復た返らず
白雲千載空悠悠　白雲　千載　空しく悠悠たり
晴川歴歴漢陽樹　晴川　歴歴たり　漢陽樹

芳草萋萋鸚鵡洲　芳草　萋萋たり　鸚鵡洲
日暮鄉関何処是　日暮　鄉関　何れの処か是なる
煙波江上使人愁　煙波　江上　人をして愁え使む

『唐詩選』[7]（巻五）から引用した。『唐詩選』では「芳草」に作られているのである。最後の一聯に、「日暮　鄉関何れの処か是なる、煙波　江上　人をして愁え使む」と歌い収められているから、この詩の主題は望郷であり、この詩の「芳草」は、上記の第二項に当たる。この点については、問題がなさそうである。だが、第五句の「晴川　歴歴たり　漢陽の樹」という一句から考えて、作者はこのとき、おそらく黄鶴楼の上から眺望していると思われる。「芳草」が「萋萋」と生い茂っている「鸚鵡洲」は、揚子江にある中洲であり、ここから彼が眺望している黄鶴楼までは、当時も現在と同様、かなりの距離があったであろう。だから黄鶴楼の上にいて、中洲の草がにおってくるなどということは、少なくとも常識的な嗅覚の機能という点から言えば、何か感覚的におかしいのではないだろうか。第二項に引用した劉長卿の詩に「江皐に芳草を見る」と表現されているが、劉長卿は眼前で見ているのであって、崔顥のように眺望しているわけではない（前稿参照）。劉長卿が「芳草」と表現したのは、『古詩十九首・其の六』（『文選』巻二十九）の「江を渉りて　芙蓉を采る、蘭沢には　芳草多し」を思い浮かべたからである。『古詩十九首・其の六』の意味については前稿において論じたので、ここでは述べない。

もっとも、この感覚的におかしいということに、作者の何か隠された意図、あるいは作者の感覚的な特異性などを認めるならば、話はおのずから別であるが、崔顥の「黄鶴楼」詩に関しては、こういう詮索は恐らく的外れである。あるいはまた、作者がこの時「芳草」と表現したのは、日常的な体験から想像して香りをかいでいるのである、という考えも成り立つかも知れない。しかし、想像であるとしても、香りをかぐということになれば、作者と草の距離が心理的ではあるが、ぐっと接近してしまい、高い建物から眺望している光景とはやはりそぐわないのではないだろう

か。どうしても「芳草」でなければならない積極的な理由が、私にはわからないのである。

右に述べた私の疑問に関して、前野直彬氏も既に感じておられたようだ。前野博士はこの詩の「芳草」を、「美しい花をつけた草」[8]と訳された。「美しい花をつけた草」は、視覚的な判断による言葉であって、嗅覚を示す言葉ではない。「芳草」は、やはりあくまでも「かおり草」である。「美しい花をつけた草」、前野博士苦心の訳語と、私は想像しているが、「芳草」本来の意味から言えば、誤訳といわざるをえない（ただし、草と表現されていても、同時に草の花を意味することがある。注4に引用した李赤の詩を参照）。そもそもこの詩の場合、「芳草」という表現に無理がある、というのが私の見解である。それはいかなることであろうか。

第二節　崔顥の眺望詩

現在まで伝わっている崔顥の詩は、『全唐詩』に収められている四二首であり、「芳草」は、第一節に引用した一例のみである。ところで「芳草　萋萋たり　鸚鵡洲」と表記されている『唐詩選』は、誰が編纂したのか問題になっているが、『唐詩選』が依拠した文献は、前野直彬氏によれば「明初の高棅「唐詩品彙」を抜粋して作ったものである」[9]ということである。崔顥にもっと近い時代の文献では、「芳草」はどう表記されているであろうか。崔顥の「黄鶴楼」詩を収録するもっとも古い時代の文献は、唐・殷璠撰『河岳英霊集』（巻中）である。この『河岳英霊集』は、専ら盛唐時代の詩人の作品を選録したものであり、唐の天宝十二載、西暦の七五三年には完成していたといわれる。[10]この説によれば崔顥がまだ在世中の時に編纂されたことになる。[11]この『河岳英霊集』（四部叢刊初編縮本405 29頁上段）では、くだんの一句は、

春草萋萋鸚鵡洲　　春草　萋萋たり　鸚鵡洲

に作られている。春という言葉そのものは感覚器官と関係がないから、黄鶴楼の上から見た春の光景、つまり視覚的なものとして詠まれたとして不自然ではない。『全唐詩』に「春（一作芳）草」と注記されているのは、上述したようなことを考慮してのことと思われるが、「春草」のほうが、本来の姿であったと、私は考える。その理由は三つある。

第一の理由は、今述べた通り、もっとも古い時代の文献で「春草」となっていること。ただし現在伝えられている文献が、原本あるいは原本を忠実に伝えているものであるかどうかは、また別問題であるが、「黄鶴楼」詩の場合、原本が「春草」となっていたことは、先ず間違いないと思われる。中澤稀男氏は、『河岳英霊集攷』（「一章 傳本」の項）において、「（唐詩紀事）の引用が南宋初の英霊集の姿をそのまゝ傳へてゐると斷ずることは出來ないにしても、これに依って南宋初の本と現行本とは、内容上大差がないことが推知せられる」と言われた。この文は、『河岳英霊集』中の評語について述べられたものであるが、詩に関しても同断であろう。崔顥詩のくだんの一句は、『唐詩紀事』（四部叢刊初編縮本432 179頁下段）も「春草」に作る。

第二の理由は、次の統計表である。

	*草	芳草	占有率	春草	占有率
初唐	110	15	14	15	14
盛唐	483	60	12	92	19
中唐	743	105	14	81	11
晩唐	611	156	26	72	12
五代	91	38	42	5	5

初唐は『全唐詩』第一函第八冊王珪から第二函第七冊陶峴まで
盛唐は第二函第八冊王維から第四函杜甫まで
中唐は第四函第五冊賈至から第八函第六冊李遠まで
晩唐は第八函第七冊杜牧から第十一函第三冊黄巢まで
五代は第十一函第四冊羅紹威から第十一函第六冊劉兼まで

今問題にしている崔顥は、盛唐に属する詩人だが、盛唐の時代においては、「春草」のほうが「芳草」より数量が多い（ここに言う盛唐とは、前記の表に注記しておいた通り、『全唐詩』第二函第八冊所収の王維から、第四函第四冊所収の杜甫までを指す。だから劉長卿や韋応物など、通常、中唐詩人と目される詩人の作品も含まれる。私の立論では、中唐と晩唐の間を境界線としているので、中唐詩人が含まれていても支障をきたさない。中唐と晩唐の間を境界線としたのは、前記の表を見れば分かるように、ここを境にして、「春草」と「芳草」の占有率が逆転するからである。また『全唐詩』といっても、前記の注の通り、すべてを網羅しているわけではない。私の表は大体の傾向である。なお「○一作●」となっている場合、原則として○字に従った）。崔顥自身に他に「春草」の用例が無く（彼の詩には○草は四例）、理由としてはあまり積極的ではないが、特別な事由がない限り時代の趨勢に従うほうが無難である。

以上の二点は崔顥をめぐる周辺の事柄であったが、第三の理由は、彼の文学の本質・詩風にかかわることであり、この論稿における眼目のひとつである。次の詩は崔顥の「題沈隠侯八詠楼」[12]と題する作品である。

梁日東陽守　梁日　東陽の守
為楼望越中　楼を為りて　越中を望む
緑窓明月在　緑窓　明月在るも
青史古人空　青史　古人空し
江静聞山狖　江静かにして　山狖を聞き
川長数塞鴻　川長くして　塞鴻を数う
登臨白雲晩　登臨す　白雲の晩
流恨此遺風　此の遺風を流恨す

詩題の沈隠侯は梁の沈約、八詠楼は、彼が南斉の隆昌元年四九四、東陽の太守をしていたとき、玄暢楼に題した作

品「八詠詩」にもとづいて呼ばれた玄暢楼の別名である（『金華志』[13]）。だから第一句の「梁日」は、正しくは「斉日」である。それはともかく、この詩は高楼からの眺望という点で、「黄鶴楼」詩の状況とよく似ている（『国秀集』は「題黄鶴楼」に作る）。問題は頸聯の一聯である。

江静聞山狖　江静かにして　山狖を聞き
川長数塞鴻　川長くして　塞鴻を数う

静かに流れる「江」、山中で鳴く「山狖」の声、果てしなく流れる「川」、一羽一羽と数えることのできる「塞鴻」の群れ。聴覚視覚ともに輪郭の明瞭な光景が、たいへん透明に表現されている。遠景の描写としてまことに申し分のない詩といえる。もう一例、「〇草」が用いられている「遼西行」[14]の初めの四句を引用しておこう。

燕郊芳歳晩　燕郊　芳歳晩く
残雪凍辺城　残雪　辺城凍る
四月青草合　四月　青草合し
遼陽春水生　遼陽　春水生ず

「四月」になって「燕郊」に果てしなく生い茂る「青草」。「青草」は視覚的表現であり、やはり眺望される遠景として、十分鑑賞に堪える表現である。崔顥は眺望詩の名手といってよい。

このように見てくると、先程の崔顥「黄鶴楼」詩の場合、高楼の上から眺望して、「芳草」と表現するということは、私には違和感が感じられるのである。やはり「春草」という語が視覚的な言葉として、いいのではないだろうか。

東郊春草色　東郊　春草の色
駆馬去悠悠　馬を駆り　去りて悠悠たり

これは、崔顥とほぼ同時代の詩人・王維の「送祾郎中[15]」と題する詩の冒頭である。遥かかなたの「東郊」に生い茂

る「春草」の「色」、視覚的な表現として素直に受け取ることができる。前野博士が「美しい花をつけた草」と訳されたのは、以上のようなことを考慮されてのことではあるまいか。

第三節　萋萋たる芳草

今まで述べたことをここで一度、まとめて整理しておく。第一節において紹介した崔顥の作品「黄鶴楼」詩の場合、『唐詩選』中のものは「芳草」、『河岳英霊集』中のものは「春草」となっていた。私の考えは、「春草」のほうが本来の姿であるということであり、その理由を三点にわたって説明した（第二節）。

それではなぜ『唐詩選』では「芳草」と表記されているのだろうか。これが次の問題である。この問題には二つのことが関わってくる。一つは、『唐詩選』にいたって、初めて「芳草」と表記されたのであろうか。もしそうでないとすれば、何時ごろ、いかなる文献から「芳草」と表記されるようになったのか。もう一つは、なぜ「芳草」と表記されるようになったのか。

まず第一点、未調査、あるいは調査不可能の文献がかなりあって、たいへん疎漏なものであるが、[16]私の調査では最初に「芳草」と表記したのは、『唐詩選』ではなく、南宋の周弼（？―一二五五？）[17]が編纂した『三体詩』[18]である。

芳草萋萋鸚鵡洲　　芳草　萋萋たり　鸚鵡洲

次に第二点、なぜ「芳草」と表記されるようになったのか。この問題を考えるとき、『三体詩』になって初めて、と断定するのはかなり危険だが、少なくとも注16に掲げておいた資料によるかぎり、『三体詩』に初めて「芳草」と表記されているということは、意味深長である。というのは、よく知られているとおり、『三体詩』は、中唐と晩唐に重点を置いた詩集だからである。[19]第二節の表をもう一度見てみると、晩唐・五代に「芳草」が異常に多くなってい

ることがわかる。今回の調査の資料である『全唐詩』においては、晩唐・五代と区別されているけれども、晩唐詩人と呼ばれる詩人の中にも、韓偓・韋莊・徐夤など五代十国まで生きた人も含まれている。要するに唐滅亡前後の数十年間は、「芳草」が多量に歌われているのである。周弼自身は二百首たらずの詩を残していて、その中で「芳草」はわずかに一例に過ぎない。[20] このような彼が『三体詩』を編纂するに当たって、この時代の作品を集めていたとき、彼は恐らく私と同じような印象を持ったのではないだろうか。「なんとも「芳草」の多いことだ」。先程言ったとおり、周弼が初めて「春草」を「芳草」と言い換えたかどうかは、絶対的には断定できない。しかし、上述のような印象は周弼に限らず、この時代の作品を通読した人間なら、おそらく誰もが受ける印象だと思われる。それほどこの時期の詩には、「芳草」が目立つのである。[21]

さて次に述べることは、私の想像である。すなわち『三体詩』を編纂していたとき、周弼は崔顥の「黄鶴楼」詩の一句「春草　萋萋たり　鸚鵡洲」の「春草」を、うっかりして「芳草」と書き間違えてしまった。いやあるいは、周弼の頃には、人々は「芳草　萋萋たり　鸚鵡洲」と詠じていた（別のいい方をすれば、現在ではみられないが、周弼が参考にした、宋代に編纂された唐詩の選本に、「芳草」となっていたものがあった）のかもしれない、と私は考えるのである。

今言ったことは想像であるが、全く根拠がないというわけではない。根拠は二つある。一番目の根拠は、「芳草萋萋たり」という表現である。劉安が「春草生じて萋萋たり」（「招隠士」『文選』巻三十三）と詠じて以来、「萋萋」という語が結びつくのは、本来「春草」であったが、この時代になると、むしろ「春草」より「芳草」のほうが、はるかに多いのである。『全唐詩』所収の晩唐から五代までの全作品を調査したところ（調査の範囲は第二節の統計表に同じ）、「芳草」と「萋萋」の組み合わせは6例、それに対して「春草」と「萋萋」の組み合わせは2例であった。ここに具体例を挙げておく。

「芳草」の例

1、萋萋芳草色（喩鳧「即時」第八函第十冊3298頁下段）
2、芳草自萋萋（馬戴「寄裴陽王公子」第九函第二冊3383頁上段）
3、芳草萋萋新燕飛（李群玉「惱從兄」第九函第三冊3462頁上段）
4、芳草萋萋憶王孫（趙光遠「題妓萊児壁」第十一函第三冊4322頁上段）
5、芳草萋萋客倦遊（胡宿「津亭」第十一函第三冊4344頁上段）
6、芳草自萋萋（徐鉉「春日紫巖山期客不至」第十一函第五冊4435頁上段）

「春草」の例

1、春草萋萋春水緑（李玖「白衣叟途中吟二首其一」[22]第九函第三冊3413頁上段）
2、不関春草緑萋萋（温庭筠「楊柳八首其五」第九函第五冊3536頁下段）

以上である。参考までに晩唐以前の唐代の用例を挙げると、次のとおりである。

「芳草」の例

1、萋萋芳草春緑（王維「田園楽七首其四」第二函第八冊715頁上段）
2、坐見萋萋芳草緑（韓翃[23]「和高平朱参軍思帰作」第四函第六冊1465頁上段）

「春草」の例

1、萋萋春草緑（劉希夷「洛川懐古」第二函第三冊502頁上段）
2、春草独萋萋（劉禹錫「長沙桓王墓下別李張南史」第三函第一冊825頁下段）

以上である。晩唐五代においては、「萋萋」と「芳草」の結びつきが多くなっていることがわかる。

二番目の根拠は、『全唐詩』には五代の人として収められているが、宋の初期まで生きていた徐鉉の「登甘露寺北望」[24]と題する、次に引用する詩である。これは、この論稿におけるふたつ目の眼目である。

京口潮来曲岸平　京口　潮来たり　曲岸平かなり
海門風起浪花生　海門　風起こり　浪花生ず
人行沙上見日影　人　沙上に行き　日影を見
舟過江中聞櫓声　舟　江中を過ぎ　櫓声を聞く
芳草遠迷揚子渡　芳草　遠く迷う　揚子渡
宿煙深映広陵城　宿煙　深く映ず　広陵城
游人郷思応如橘　游人の郷思は応に橘の如くなるべく
相望須含両地情　相望めば須らく両地の情を含むべし

この作品は、前稿においても取りあげた。したがって私がこれから記述することは、前稿と重複するところがある、ということを断っておく。詩題の「甘露寺」は、第一句の「京口」（現在の江蘇省鎮江市）つまり揚子江が海に注ぐ辺りにある揚子江南岸の町、そこにそびえる北固山という山の上にある寺の名。「甘露寺」の北方遥かかなたには、揚子江を挟んで揚州（広陵城）がある。揚州は作者の故郷であり、[25] 彼は「甘露寺」から北に向かって自分の故郷を眺めているのである。問題は、第五句の「芳草　遠く迷う　揚子渡」である。この句は、「芳草」が生い茂っているために、揚子江の北岸にある、故郷へ続く「揚子渡」（いわゆる揚子津と呼ばれる船つき場であり、揚子江の北岸にある）がどの辺りにあるのか、迷ってしまうという意味だが、前稿に記述したごとく、「芳草」から望郷という連想が働いていたとしても、「芳草」本来の意味にこだわる限り、この句も崔顥の「黄鶴楼」詩の「芳草」と全く同じように、感覚的には奇妙な句といわなければならない。

しかし、ここで大事なことは、遥かかなたを眺望して「芳草」と表現した作品が、五代時代（正確には十国の南唐）[26] に至って確かに出現したということである（私の調査では眺望して「芳草」と表現したものは、この詩以前には皆無である）。

徐鉉の作品は『三体詩』に一つも採録されていないし、[27] また既に述べたとおり、周弼の『三体詩』に至って、初めて崔顥の「黄鶴楼」詩の一句が「芳草」と表記されたという百パーセント確かな証拠はない。しかし、

芳草　遠く迷う　揚子渡

と、遠方を眺望して「芳草」と表現する詩がこの時代に存在することを考えれば、少なくとも五代以後に編纂された唐詩の選集の中に、「黄鶴楼」詩を

芳草　萋萋たり　鸚鵡洲

と表記したものが現われても、必ずしも不思議なことではないのである。

『三体詩』以後、現代人による唐詩の選本・訳注書の類に至るまで、「芳草　萋萋たり　鸚鵡洲」と表記されるのが一般的な傾向である。「晴天眺望対岸漢陽的樹歴歴在目、江心鸚鵡洲上的春草非常繁茂」（傍線は引用者）これは、栗斯著『唐詩故事　第一集』12頁（地質出版社　一九九年）に採録されている崔顥の詩句「芳草　萋萋たり　鸚鵡洲」に対する現代語訳である。私は第一節において、前野博士の訳語「美しい花をつけた草」を誤訳といった。だが、徐鉉の「芳草　遠く迷う　揚子渡」の一句を知った以上、原作の詩想からはもとよりはみ出るものであるけれども、「芳草」を「美しい花をつけた草」あるいは「春草」と訳しても、あながち誤訳とは言えないかもしれない。

なお補足すれば、崔顥の詩の「芳草」に対して、今日まであまり問題にされなかったのは、おそらく李白と関係がある。よく知られているように、崔顥の「黄鶴楼」詩は、李白をして作詩を断念せしめたという逸話が伝わっている。『苕渓漁隠叢話・前集』[28]（巻五）に宋・李畋の『該聞録』を引用していわく、「李太白　大名を負いて、尚お「眼前に景有るも道うを得ず、崔顥の題詩　上頭に在ればなり」と曰う。之に擬し勝負を較べんと欲し、乃ち「金陵にて鳳凰台に登る」詩を作れり」。この事件は、計有功に「恐らく然らず」[29]と否定されているように、作り話に過ぎないであろう。「金陵にて鳳凰台に登る」詩はさておいて、元・方回の『瀛奎律髄』（巻一）に李白の「鸚鵡洲」と題する作品

が収録されており、方回は「鸚鵡洲」詩に対して、次のように論評した。[30]

太白の此の詩は乃ち是れ崔顥の体に效うなり。皆な五六に於て工を加え、尾句に感嘆を寓す。

李白の「鸚鵡洲」詩は、崔顥の「黄鶴楼」詩を模倣したというのである。「鸚鵡洲」詩は、次のような作品である。

鸚鵡来過呉江水　鸚鵡　来り過ぐ　呉江の水
江上洲伝鸚鵡名　江上の洲は伝う　鸚鵡の名
鸚鵡西飛隴山去　鸚鵡　西のかた隴山に飛び去るも
芳洲之樹何青青　芳洲の樹　何ぞ青青たる
烟開蘭葉香風暖　烟　蘭葉を開いて　香風暖かく
岸夾桃花錦浪生　岸　桃花を夾みて　錦浪生ず
遷客此時徒極目　遷客　此の時　徒らに極目す
長洲孤月向誰明　長洲の孤月　誰に向かいてか明かなる

注意すべきは、第四句の「芳洲之樹」である。方回の評語が暗示するように、「芳洲之樹」は、崔顥の「芳草」を下敷きにしていると考えられてきたのである。手元にある李白の訳注書から、一例紹介しておこう。「[芳洲]　洲上香草叢生、所以叫芳洲。崔顥《黄鶴楼》詩：晴川歴歴漢陽樹、芳草萋萋鸚鵡洲」[31]。しかしながら、「鸚鵡洲」詩が「黄鶴楼」詩を意識して作られたとしても、このことからただちに「黄鶴楼」詩が「芳草」に作られていたと断定することは、もちろんできない。李白が「芳洲之樹」と表現したのは、ひとつは彼が実際に鸚鵡洲の上にいたからであり、もうひとつは鸚鵡洲の名が反骨の人・禰衡にちなむものであるからである。李白の「望鸚鵡洲懐禰衡」詩[32]に、「今に至りても　芳洲の上、蘭蕙　生じるに忍びず」と歌われている。禰衡の人となりに思いを寄せていた李白は、禰衡の人徳を蘭蕙の「芳草」に比擬しているのであって、崔顥とは状況が全然違うのである。

第四節　失墜した芳草

以上、崔顥の「黄鶴楼」詩の第六句は、本来「春草　萋萋たり　鸚鵡洲」であったこと、またそれが、いつごろ、なぜ「芳草　萋萋たり　鸚鵡洲」と愛唱されるようになったのか、という点に関して私の考えを述べた。これを一言でいえば、晩唐五代時代は「春草」よりも「芳草」の方が好まれた、ということであるが、晩唐五代時代になって、なぜ「芳草」が好まれたのか、という点に関しては前稿において論じた。本論の最後として徐鉉の「芳草　遠く迷う　揚子渡」一句は、いかなる意味を持つのか、私の考えを述べておきたい。

徐鉉の「芳草　遠く迷う　揚子渡」は、第一節に掲げた五項目のうち、第二項目に属するわけだが、徐鉉が心の中に描いていた「芳草」は、嗅覚を刺激する属性というよりも、単なる雑草特有の生命力という属性にあったのではないだろうか。次に引用するのは、同人の「和太常蕭少卿近郊馬上偶吟」[33]と題する詩である。

田園経雨緑分畦　田園　雨を経て　緑　畦を分かち
飛蓋閑行九里堤　飛蓋　閑かに行く　九里堤
払袖清風塵不起　袖を払う清風　塵起らず
満川芳草路如迷　川に満つる芳草　路　迷うが如し
林開始覚晴天迥　林開けて始めて晴天の迥かなるを覚え
潮上初驚浦岸斉　潮上りて初めて浦岸の斉しきに驚く
怪得仙郎詩句好　怪しみ得たり　仙郎　詩句の好しきを
断霞残照遠山西　断霞　残照　遠山の西

問題は第四句の「川に満つる芳草　迷うが如し」である。太常蕭少卿（蕭盛のこと）の作品が残っていないのは残

念だか、右の一句は、先程の五項目のどの項目にも該当しない。また例えば楊巨源「春日有贈」[34]の「歩むこと遠くして芳草を憐れみ、帰ること遅くして綺霞を見る」に見られるような、「芳草」をいとおしむ心もない。このような点から考えると、「川に満つる芳草　路　迷うが如し」と表現した時、徐鉉は「芳草」を「川」（原野）一面を覆い尽くしてはびこる、単なる雑草とイメージしていたと判断していいと、私は考える。問題の「芳草　遠く迷う　揚子渡」が、第三節に述べたとおり、ぼうぼうと生い茂る「芳草」に視覚が遮られ、故郷へ続く「揚子渡」が見えなくなった、と言っていることから考えて、この句の「芳草」も雑草とみなしていいであろう。我々はこの徐鉉のふたつの詩句に限って言えば、もはや「芳」という字にこだわる必要は、まったくないのである。[35]だから仮に「芳草」を「春草」と表現したとしても、不都合はないのであるが、「春草」と言わず「芳草」と表現した点こそが、いかにも彼が五代の詩人である所以なのである。彼の詩には「春草」という例は皆無である。[36]

ところで右述したことは、一体いかなることを意味するのであろうか。前稿で指摘したとおり、「芳草」という言葉が文学作品に初めて現れたのは、『楚辞』である。『楚辞』における「芳草」は、己れの正義を最後まで貫いた、誇り高い屈原の象徴であり、それは実に天上の神々と地上の人間を結びつける、香り高い神聖な植物であった。[37]それが長い歴史の流れの中で、いつの間にか天上の神々は忘れ去られ、晩唐五代に至って、異常とも思える「芳草」の頻出を現出した。このような頻出にまぎれて、徐鉉の詩の中では他ならぬ「芳草」が、『楚辞』において「芳草」と正反対のものと考えられていた雑草に変質してしまっているのである。これは誇張して言えば、「芳草」というわずか一語の小さな世界も、生成、発展そして消滅という法則から免れることはできない、ということを意味していると思われるが、時代精神を徴表するものとしての「芳草」は、晩唐五代をもって終焉した、と私は前稿において述べた。徐鉉はこの論稿で扱った詩人の内、もっとも晩期に属する詩人である。『楚辞』に始まる「芳草」を歴史の流れにおいて眺めたとき、この点においても、この時代は「芳草」の一つの終焉を告げる時代であったといえるのである。もっ

とも、雑草へ失墜した「芳草」は、やがて北宋の邵雍にいたって、仙界の「芳草」として復活することになる。仙界の「芳草」、いずれ稿を改めて述べることにしたい。

注釈

1、『全唐詩』第二函第九冊740頁上段　復興書局本（中華民国五十六年十月再版）。
2、南斉の檀約の「陽春曲」（『楽府詩集』巻五十一）に「已見紅花発、復聞緑草香」と、「緑草の香を聞ぐ」と歌われているが、「芳草」をかぐという例はないようだ。それは、「芳草」といえばすぐさま香りを連想することが自明であったからではないか、と考えられる。
3、『全唐詩』第三函第一冊841頁下段。
4、李赤の「望夫山」詩に「芳草不知愁、巌花但争発」（『全唐詩』第七函第九冊2840頁下段）と歌われているが、これは、第二項の更なるヴァリエーションである。
5、『箋注陶淵明集』巻五（四部叢刊初編縮本133　52頁上段）。
6、『全唐詩』第十一函第五冊4448頁上段。
7、前野直彬注解『唐詩選　中』（岩波文庫320頁）。
8、『唐詩選　中』（岩波文庫321頁）。
9、『唐詩選　下』（岩波文庫384頁）。なお、『唐詩品彙』「七言律詩巻之二　八十三」（上海古籍出版社　一九八二年）も「芳草」に作る。
10、李珍華・傅璇琮撰『河岳英霊集研究』102頁（中華書局　一九九二年）。ただし、中澤希男氏の見解では、「この集は建中（七八〇―七八三）以後の編と見なければならない」（「河岳英霊集攷」『群馬大学紀要　第一巻』所収）。なお、同じく唐人選唐詩の一つである唐・芮挺章編『国秀集』は、天宝三年（七四四）に完成したとされているが（宋・曾彦和『国秀集跋』）、この時すぐに世間に問われたのではなくて、草稿は『国秀集』の序文を書いた友人の楼頴のところに保管されていた。そして実際に発行されたのは、上元（七六〇―七六二）中のことであり、『河岳英霊集』より遅れるという。『河岳英霊集研究』18頁。また『河岳英霊集研究』より以前に、中澤希男氏が「乾元（七五八―七六〇）から広徳（七六三―七六四）にかけて

の六七年間」という説を提出しておられる。『日本中国学会報　第三冊』（昭和二十六年　一九五一年）。なお『河岳英霊集』と『国秀集』の影響関係はないようだが、『国秀集』巻中（四部叢刊初編縮本405　14頁上段）も「春草」（春草青青鸚鵡州）に作る。

11、『旧唐書』巻一百九十下「崔顥伝」に「天宝十三年（七五四）卒す」とある。

12、『全唐詩』第二函第九冊739頁下段。

13、還欽立輯校『先秦漢魏晋南北朝詩　中』（中華書局　一九八三年　1663頁）注引。

14、『全唐詩』第二函第九冊740頁上段。

15、『全唐詩』第二函第八冊708頁上段。

16、唐詩の選本に関する研究は、孫琴安著『唐詩選本六百種提要』（陝西人民出版社　一九八七年）がたいへん詳細で、有益である。私は孫氏の著書に教えられて、可能な限り調査したが、以下に掲示しておいたとおり、寥寥たる数点に過ぎない。私が調査し得た『三体詩』以前の文献名をここに掲げておく。先ず、崔顥「黄鶴楼」詩が採録されているもの。

①、唐・殷璠『河岳英霊集』、②、唐・芮挺章『国秀集』、③、唐・韋莊『又幻集』（文淵閣四庫全書本）、④、五代・韋縠『才調集』（四部叢刊初編本）、⑤、宋・王安石『唐百家詩選』（文淵閣四庫全書本）、⑥、宋・李昉等『文苑英華』（新文豊出版公司　中華民国六十八年）、⑦、宋・姚鉉『唐文粋』（四部叢刊初編本）、⑧、宋・計有功『唐詩紀事』（同右）。

これらすべて「春草」に作る。次に崔顥「黄鶴楼」詩が採録されていないもの。

①、唐・佚名『搜玉小集』（文淵閣四庫全書本）、②、唐・佚名『唐写本唐人選唐詩』（同右）、③、唐・元結『篋中集』（同右）、④、唐・令狐楚『御覧詩』（同右）、⑤、唐・高仲武『中興間気集』（同右）、⑥、唐・姚合『極玄集』（同右）、⑦、宋・趙師秀『衆妙集』（同右）。

17、鈴木虎雄博士によれば、周弼は、西暦の一二五二年から一二五七年の間に亡くなり、九十歳前後まで生きていたとされる。『支那文学研究』220頁　弘文堂書房　大正十四年）。また同書に、素隠の『三体詩鈔』の「三体詩集起」に、淳祐十年（一二五〇）秋八月に『三体詩』は完成したと記されている、という指摘がある。

18、『箋註唐賢三体詩法（巻之十）』（広文書局　中華民国六十一年）。

19、村上哲見氏は、次のように言われた。「概数を挙げるならば、初唐・盛唐をあわせてほぼ二〇人程度にすぎず、中唐・晩唐はほぼ等しく、おのおの六、七〇人前後を数える」。『三体詩　上　解説』3頁（新訂中国古典選　朝日新聞社　昭和42年）。

20、「秋夜」詩に「古道　人稀れに　芳草歇く」とある（『端平詩雋』巻四『文淵閣四庫全書』本）。

21、徐鉉を除いて、「芳草」を多量に歌った杜牧・劉滄・羅鄴・韋莊・李中、すべて『三体詩』に作品が採録されている。

22、李洞に「繡嶺宮詞」と題する詩（『全唐詩』第十一函第二冊4811頁上段）があり、その第一句が「春日遲遲春草緑」となっている以外は、李玖詩とまったく同じである。しかも李洞詩の第一句には「一作春草萋萋春水緑」と注記がある。つまり李玖詩と李洞詩はまったく同じ作品と考えられるのである。これは、『全唐詩』が底本としたとされる明の胡震亨撰『唐音統籤』をそのまま襲ったのであろうが、なぜこのようなことになったのであろうか。例えば『三体詩』（巻七）をみると、李洞「繡嶺宮詞」として「春草萋萋春水緑」となっており、「唐詩品彙」（巻五十四）では、同じく李洞「繡嶺宮詞」として「春日遲遲春草緑」となっている。作者が李玖と李洞の二人に分裂し、また『三体詩』などは「春草萋萋」となり、『唐詩品彙』などは「春日遲遲」となっているのか、その原因について目下のところ私にはわからない。いずれにしても、以上のような事情が介在して、『全唐詩』に「春日遲遲春草緑一作春草萋萋春水緑」と注記されているのであろう。なお李玖詩の『全唐詩』注に李玖の『纂異記』なる書物が引用され、その中に出てくる作品の作者が他ならぬ李玖であるという按語がある。

23、『文苑英華』（巻二百四十五）は韓愈の作とする。なお、劉長卿の「江潭芳草萋萋」（『苕渓酬梁耿別後見寄』第三函第一冊853頁上段）は、「春草」にも作るので除外した。

24、『全唐詩』第十一函第五冊4434頁上下段。又『徐公文集』巻一（四部叢刊初編縮本173　8頁上段）。

25、李昉撰『大宋故静難軍節度行軍司馬検校工部尚書東海徐公墓誌銘』（『徐公文集』付録。以下、『徐公墓誌銘』と略称）に「其先会稽人、自言生于揚州」とある。徐鉉自身は、自分を揚州の人間と考えていた。

26、私の推測では、本文に引用した作品は、恐らく南唐の初期に広陵（揚州）で仕えていた時の作と思われる。前稿『「芳草」考—晩唐五代文学の一面—』注16に「呉に初めて出仕した時の作であろうか」と書いたのは、粗忽な誤りである。ここに訂正した上で、簡単な考証をしておく。

陳彭年「故散騎常侍東海徐公集序」（『徐公文集』巻首所収）に、「公江南文藁、撰集未終、一経乱離、所存無幾、公自勒成二十巻。及帰中国、入直禁林、制誥表章、多不留草。其余存者、子婿尚書水部員外郎呉君淑編為十巻、通成三十巻」とあり、『四庫全書総目提要』巻一百二十五「集部五　別集類五」所収「騎省集三十巻」（『徐公文集』に同じ）の条に、「陳氏（陳振孫『直斎書録解題』を指す）称其前二十巻、仕南唐（陳氏の原文には「江南」に作る）時作、後十巻、皆帰宋後作。今勘集中所載年月事跡、亦皆相符」とある（傍線は引用者）。徐鉉自身が勒成したとされる江南時代の作品は、恐らく製作

年代順に編集されている。以下に私が調査し得た範囲で報告すると、次のようなことが言える。胡某撰『宋故金紫光禄太夫左散騎常侍上柱国東海県開国伯食邑七百戸賈授静難軍節度行軍司馬徐公年七十六行状』（『徐公文集』付録。以下、『行状』と略称。なお胡某は徐鉉の門下生である胡克順のこと。四川大学古籍整理研究所編　曾棗荘　劉琳主編『全宋文』（巻一九〇）参照）に、壬子の歳（九五二年）以後の記事として、徐鉉が①楚州および常州を訪れたこと、②舒州に流されたこと、③饒州に移されることになったが、④後周の侵攻によって沙汰止みになり、彼はそのまま昇州（南京）に難を避けたことが記されている。『徐公文集』を見ると、詩題のみについて言えば、楚州を訪れた作品がない点を除いて、右述した足跡を示す作品が、時間的に齟齬をきたすことなく配列されている。①「常州駅中喜雨」、……、②「謫居舒州累得韓高二舎人書作此寄之」、……、②「印秀才至舒州見尋（以下略）」……、③「移饒州別周使君」、④「避難東帰依前韻和黄秀才見寄」（……は、中間に他の作品があることを示す）。

次に、製作年代順に編集されていると考えると、よく納得出来る例を紹介する。『行状』に壬子の歳（九五二年）以前の事件として、次のような記述がある。「及江淮之平建州也、而福州与越人拒命不服、使陳覚・馮延魯招撫之。未報、遂擅興兵攻取。（中略）衆敗績而退、乃帰罪二使、将誅之。（中略）公与韓公（韓熙載）議云々」とある。この事件があったのは『資治通鑑』によれば、高祖天福十二年（九四七）である（巻二百八十六「後漢一」）。更にこの事件の前に『行状』に、徐鉉に直接関わる、次のような事件が記されている。「後覩受命草詔者、無所経拠、不根事実、由是駁議、忤旨、左遷泰州幕職。（中略）謫居三年、嗣主（南唐中主）知其無罪、徴復本官、仍知制誥」。このときの作品が、「貶官泰州出城作」として、『徐公文集』巻三の冒頭にある。ところでこの作品より前に「賀殷游二舎人入翰林江給事拝中丞」と題する詩があるが、江給事（江文蔚）が中丞を拝したのは、九四五年である（徐鉉「唐故左諫議太夫翰林江君墓誌銘」『徐公文集』巻十五）。「賀殷游二舎人入翰林江給事拝中丞」詩と『行状』の「謫居三年」の文および『資治通鑑』の記述を総合すると、徐鉉が泰州に左遷されたのは、九四五年ということになる。なお、製作年のはっきりしている作品に、「送鍾員外詩序」（歳辛亥（九五一年）冬という記述がある）がある。この作品は、「貶官泰州出城作」詩より後、「常州駅中喜雨」詩より前に置かれており、配列上まったく問題ない。

以上、まことに大雑把な考証であるが、私の考証に間違いがなければ、次のことが言える。徐鉉は、『宋史』（巻四百四十一「本伝」）によれば、先ず初めに呉に仕えて校書郎となった。まだ二十歳になる前である（『行状』）。その後、呉に替わって南唐が起こったとき（九三七年）、徐鉉はそのまま南唐に仕えることになった（彼は『宋史』「本伝」によれば、淳化二年

（九九一）七十六歳で亡くなっている。逆算すると、このとき二十二歳）。ところで、本文に取りあげた詩「登甘露寺北望」は、『徐公文集』において、はじめから数えて五番目に置かれており、この詩の前にある作品は順番に記すと、①「早春左省寓直」、②「寒食宿陳公塘上」、③「将去広陵別史員外南斎」、④「将過江題白沙館」である。そして③・④・⑤（「登甘露寺北望」）は一連の行動であり、作者の目的地は、④の詩に「少長在維揚、依然認故郷。金陵佳麗地、不道少風光」と歌われていることから考えて、金陵つまり南京であったと思われる。また①に「左省」とあるが、「左省」は普通、門下省を言う。彼が呉に仕えていたとき、門下省に所属していた形跡はなく、南唐の先主のときに初めて勤めることになった（『行状』、『宋史』「本伝」、『徐公墓誌銘』）。以上を確認して、これから記述することは、私の推測である。①と②の作品は、恐らく南唐の初期に広陵（揚州）で仕えていた時の作。③・④・⑤は、配置替えか何かの理由で金陵（南京）に仕えることになり、広陵を出発した時の作。

27、徐鉉の作品が採録されていないのは、彼が宋の人と考えられたからであろう。

28、『文淵閣四庫全書』第一四八〇冊71頁上段。

29、『唐詩紀事』（巻二十一）四部叢刊初編縮本432 179頁下段。

30、『文淵閣四庫全書』第一三六六冊9頁下段。なお『瀛奎律髓』（巻一）所収の崔顥詩も「芳草」に作る。

31、復旦大学古典文学教研組『中国古典文学読本叢書　李白詩選』200頁（人民文学出版社　一九八六・北京）。

32、『全唐詩』第三函第六冊1016頁上段。

33、『全唐詩』第十一函第五冊4448頁下段。

34、『全唐詩』第五函第九冊1957頁下段。

35、劉長卿の「過鄭山人所居」詩（『全唐詩』第三函第一冊854頁下段）に「落花芳草無尋処」という句があるが、これは、陶淵明の「桃花源記」を踏まえたもの、つまり本文第一節に示した三番目の項目に該当するものであり、この「芳草」は、詩題の山人つまり世捨て人の住居を暗示する。更にまた皇甫冉の「屏風上各賦一物携琴客」詩（『全唐詩』第四函第七冊1501頁下段）の「白雲知隠処、芳草迷行跡」の「芳草」も、「白雲」と対になっていることから考えて、「携琴客」つまり世捨て人の世界のイメージである。「芳草」「白雲」は、ひとつのパターンである。

36、前稿の個人別表に表示しておいたとおり、彼の詩における「芳草」占有率は、58％である。ここに具体例を掲げておく。

「芳草」の例

①、芳草遠迷揚子渡（「登甘露寺北望」『全唐詩』第十一函第五冊4434頁下段）。
②、芳草自萋萋（「春日紫巖山期客不至」同4435頁上段）。
③、繞堵芳草影隨行（「春夜月」同4435頁下段）。
④、宿露依芳草（「賦得風光草際浮」同4443頁上段）。
⑤、極目牛羊臥芳草（「亜元舎人（以下略）」同4444頁上段）。
⑥、遠山芳草映残霞（「還過東都留守周公筵上贈座客」同4445頁上段）。
⑦、満川芳草路如迷（「和太常蕭少卿近郊馬上偶吟」同4448頁上段）。

「芳草」以外の例

①、衰草満庭空佇立（「賦得有所思」同4435頁上段）。
②、蕙草堵前特地寒（「和殷舎人蕭員外春雪」同4435頁下段）。
③、訟庭織草転応生（「和王庶子寄題兄長建州廉使新亭」同4436頁上段）。
④、碧草垂低岸（「水」同4457頁上段）。
⑤、百草千花共待春（「柳枝詞十首其二」同4457頁上段）。

以上である。「芳草」の使用例が圧倒的に多いこと、および「芳草」以外は各々一例ずつしかないことから考えて、彼がいかに「芳草」にこだわったか、よくわかる。[38]

37、志村良治「褻祭」と古歌謡―「匂い」の文学の起源―」（『志村良治博士著作集Ⅰ　中国詩論集』所収　汲古書院　昭和六十一年）参照。

38、なお、王重民　孫望　童養年輯録『全唐詩外編』「第三編　全唐詩補逸」246頁（中華書局　一九八二年）に採録されている「呉王挽辭二首其一」に「白草建康宮」という句がある。

（一九九四年十一月三十日受理）